

## 新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達 およびメンタルヘルスとの関連 (5)

高澤 健司<sup>(1)</sup>

### Study on relation of student well-being with career development and mental health in brand-new university (5)

TAKASAWA Kenji<sup>(1)</sup>

This questionnaire study investigated well-being of students at a brand-new university. There were both positively influenced and negatively influenced groups of students. The first graduates affected more by the consciousness of being a brand-new university than the second graduates. The first graduates and the second graduates were analyzed in terms of relation between the influence and, ego identity, subjective adjustment and daily life skill using the t-test when they were senior. The results showed that the first graduates had higher scores at self-sameness and continuity factor and interpersonal identity factor than the second graduates. It is important to be a campus life model for their juniors.

Keywords : brand-new university, seniors, campus life, career development, mental health

#### 問題と目的

本研究は、新設大学であることがもつ学生に対する影響を、大学生活への意識およびメンタルヘルスの問題と、キャリアに関する意識や行動の発達との関連において検討することを目的とし、新設1年目の入学生（1期生）を1年生時から縦断的に継続調査してきた調査研究であり、「新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連」(高澤・播磨, 2013)と「同(2)」(高澤・播磨, 2014), 「同(3)」(高澤・播磨, 2015)「同(4)」(高澤・播磨, 2016)に続く、第5報である。

高澤・播磨(2013)では新設大学の開設1年目の入学生(1期生)を対象に、先輩というモデルがない状況での学業や大学生活の充実感についての意識と、メンタルヘルスの問題、キャリアに関する意識や行動の発達との関連について検討した。その結果、新設大

学であることが大学生生活の充実感に影響があると感じる学生の中にも、プラスと感じる学生とマイナスと感じる学生の両方がおり、全体としてはプラスと感じる学生は、影響がないと感じたり影響をマイナスと感じる学生に比較してよりポジティブな特徴をもっていることが明らかになった。しかしマイナスの場合にも否定的な意味だけではなく自己探索的な面でポジティブな意味があることが示唆された。

次に開設2年目の調査を行った高澤・播磨(2014)では、新設大学であることが大学生生活の充実感にマイナスの影響を与えると考える学生の比率が増加した。そして、充実感にプラスの影響を感じる学生には、キャリア発達やメンタルヘルスの各尺度においてポジティブな傾向が、マイナスの影響と感じる学生にはネガティブな傾向が示された。同時に2期生にも同様の調査を実施し、1期生と2期生との比較検討

<sup>(1)</sup>福山市立大学教育学部児童教育学科

をした結果、学生生活への積極性に関する面で、1期生が2期生よりもポジティブな傾向が強いことが明らかになった。

開設3年目での高澤・播磨(2015)では、3年生となった1期生の現状と1年生時からの経年的変化を検討するとともに、2期生、3期生にも同様の調査を実施し、新設3年目における各期生の特徴の比較検討を行った。その結果、入学年度が下がるにしたがって新設大学であることが学生生活に影響を及ぼすと考える学生の割合が下がっていること、キャリア発達やメンタルヘルスの各尺度得点の各期生間の比較で、新設3年目では1期生が全ての尺度のいくつかの因子において他の2期生、3期生より有意に高い得点を示し、ポジティブな傾向が高いことが示された。しかし各期生の1年生時の得点を比較した結果では1期生と他期生との差はみられず、入学年度による学生の状況に大きな差は認められなかった。

そして開設4年目での高澤・播磨(2016)では、4年生になった1期生の現状と学年進行による変化を、他の学年との比較や、1年生時からの経年的変化によって検討し、あわせて新設4年目における入学年度別の学生の特徴を検討した。その結果、3年生時になるとモデルとなる先輩の不在がマイナス面として意識されてくること、特にキャリア探索において先輩の存在の重要性が意識されること、しかし4年生になると収まってくることから、3年生の後期頃に学生の成長のひとつの節目が想定できるかもしれないことなどが示唆された。また、2期生、3期生、4期生では新設大学であるという意識が薄らいでいることが示された。

本研究は以上のようなこれまでの研究を踏まえ、1期生と2期生の各年時および4年時における結果を検討し、先輩というモデルがないという特徴をもつ1期生と、先輩がいる状況である2期生との比較を行うことによって、新設大学であることが学生生活を通してキャリア発達やメンタルヘルスに与える影響を分析し、今後の学生支援や指導への示唆を検討することを目的とする。

## 方法

1. 調査協力者：中国地方の新設四年制大学に所属する1期生(2011年度入学生)は、1年生時は204名に対して調査を行い、204名から回答を得た(回収率

100%)。うち回答不備等による無効回答を除く191名(男70名、女120名、不明1名)を分析対象とした(有効回答率93.6%)。平均年齢は18.9歳(標準偏差1.80)であった。2年生時は229名に対して調査を行い、229名から回答を得た(回収率100%)。うち回答不備等による無効回答を除く217名(男84名、女133名)を分析対象とした(有効回答率94.8%)。平均年齢は19.8歳(標準偏差0.56)であった。3年生時は259名に対して調査を行い、151名から回答を得た(回収率58.3%)。うち回答不備等による無効回答を除く149名(男48名、女101名)を分析対象とした(有効回答率98.7%)。平均年齢は20.8歳(標準偏差0.56)であった。4年生時は259名に対して調査を行い、112名から回答を得た(回収率43.2%)。うち回答不備等による無効回答を除く107名(男30名、女77名)を分析対象とした(有効回答率95.5%)。平均年齢は21.8歳(標準偏差0.93)であった。

2期生(2012年度入学生)は、1年生時は226名に対して調査を行い、226名から回答を得た(回収率100%)。うち回答不備等による無効回答を除く212名(男76名、女136名)を分析対象とした(有効回答率93.8%)。平均年齢は18.8歳(標準偏差0.56)であった。2年生時は212名に対して調査を行い、212名から回答を得た(回収率100%)。うち回答不備等による無効回答を除く200名(男77名、女123名)を分析対象とした(有効回答率94.8%)。平均年齢は19.8歳(標準偏差0.59)であった。3年生時は263名に対して調査を行い、126名から回答を得た(回収率47.9%)。うち回答不備等による無効回答を除く122名(男40名、女82名)を分析対象とした(有効回答率96.8%)。平均年齢は20.9歳(標準偏差0.58)であった。4年生時は263名に対して調査を行い、101名から回答を得た(回収率38.4%)。うち回答不備等による無効回答を除く91名(男34名、女57名)を分析対象とした(有効回答率90.1%)。平均年齢は21.8歳(標準偏差0.52)であった。

2. 実施時期：1期生は2011年から2014年の毎年11月から12月で、2期生は2012年から2015年の毎年11月から12月であった。1年時と2年時については、一斉授業を通じて質問紙の配布および回収を行い、3年時と4年時はゼミを通じて調査用紙を配付し、厳封

の上後日回収した。

### 3. 調査内容

#### 1) 新設大学であることへの意識に関する項目

①性別、年齢、居住形態、出身地域、②大学選択理由、③新設大学であることの大学選択への影響、④新設大学であることの現在の学生生活への影響、⑤新設大学であることの後進の進路への影響を尋ねる項目、

#### 2) キャリア探索尺度 (安達, 2008) (5 件法)

キャリアに関する環境への探索行動である「環境探索因子」と、キャリアに関する自分への探索行動である「自己探索因子」の2因子構成。

#### 3) 多次元自我同一性尺度 (谷, 2001) (7 件法)

自己の不変性および時間的連続性についての感覚である「自己斉一性・連続性」、自己意識の明確さの感覚である「対自的同一性」、他者から見られているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致している感覚である「対他同的同一性」、自分と社会との適応的な結びつきの感覚である「心理社会的同一性」の4因子構成。

#### 4) 学校への適応感尺度 (大久保, 2005) (5 件法)

周囲に溶け込め、なじんでいることから生じる気楽さ、快適さ、居心地の良さである「居心地の良さの感覚」、課題や目的があることによる充実感である「課題・目的の存在」、周囲から信頼され、受容されている感覚である「被信頼・受容感」、周囲との関係による劣等感である「劣等感の無さ」の4因子構成。

#### 5) 日常生活スキル尺度 (大学生版) (島本・石井, 2006) (4 件法)

友人たちと親密な関係を維持するスキルである「親和性」、自分が所属する集団内での活動に積極的に関わっていかうとするスキルである「リーダーシップ」、時間的展望と物事の優先順位を考慮した先見のスキルである「計画性」、相手の気持ちへ感情移入するスキルである「感受性」、情報を秩序立てて再構成するスキルである「情報要約力」、現在のありのままの自分を肯定的にとらえるスキ

ルである「自尊心」、困難に遭遇したときでも前向きに考えるスキルである「前向きな思考」、相手に対して好ましくない印象を与えないよう意識されたスキルである「対人マナー」の8因子構成。

各尺度の下位因子の平均点を算出し個人の得点とした。

### 結果

#### 1. 新設大学であることの大学生活の充実度への影響の比較

高澤・播磨 (2013, 2014, 2015, 2016) と同様に、新設大学であることが大学生活の充実感に及ぼす影響をどう感じるかによって、影響はない (以下, 影響なし)、プラスの影響がある (以下, 影響プラス)、マイナスの影響がある (以下, 影響マイナス) の3群に分け、1期生および2期生各学年時の分布を示す。

1年時において、1期生は「プラス」と考えているグループ (以下, プラス) が47名 (25%)、「影響なし」と考えるグループ (以下, 影響なし) が85名 (44%)、「マイナス」と考えるグループ (以下, マイナス) が58名 (30%)、不明が1名であった。一方、2期生では、プラスが32名 (15%)、影響なしが97名 (46%)、マイナスが83名 (39%) であった (図1)。

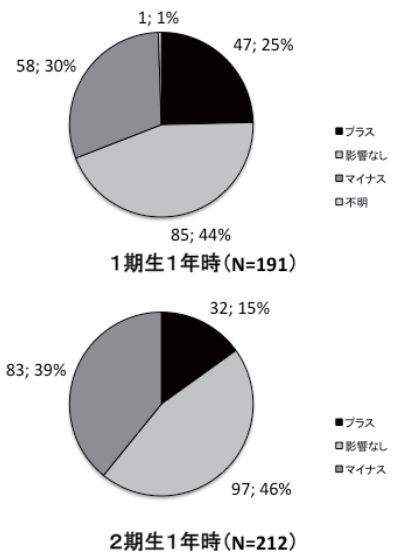


図1 1年時における新設大学であることの学生生活の充実度への影響

2年時において、1期生はプラスが45名(21%)、影響なしが89名(41%)、マイナスが83名(38%)であった。2期生は、プラスが32名(16%)、影響なしが106名(53%)、マイナスが62名(31%)であった(図2)。

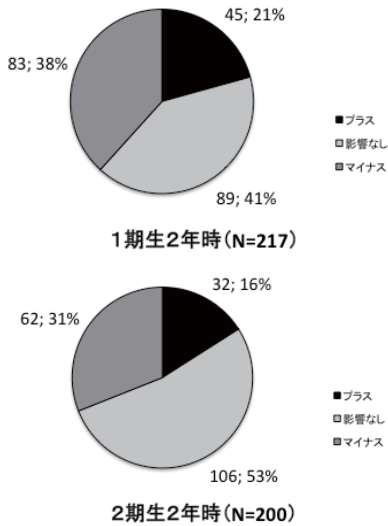


図2 2年時における新設大学であることの学生生活の充実度への影響

3年時では、1期生はプラスが27名(18%)、影響なしが67名(45%)、マイナスが55名(37%)であり、2期生はプラスが26名(21%)、影響なしが57名(47%)、マイナスが39名(32%)であった(図3)。

そして4年時では、1期生はプラスが23名(21%)、影響なしが49名(46%)、マイナスが35名(33%)で、2期生はプラスが12名(13%)、影響なしが52名(57%)、マイナスが27名(30%)であった(図4)。

いずれの学年時においても、影響なしの割合が2期生においてわずかながら多い傾向が見られた。

## 2. 4年生時におけるキャリア探索、アイデンティティ、適応感、日常生活スキルについての1期生と2期生の得点比較

高澤・播磨(2016)では、各尺度における1期生と2期生の3年生時における得点を比較し、キャリア発達尺度における環境探索因子において、1期生の方が2期生よりも有意に得点が高かった。この傾向が4年時において、どのような形になるのか1期生と2期

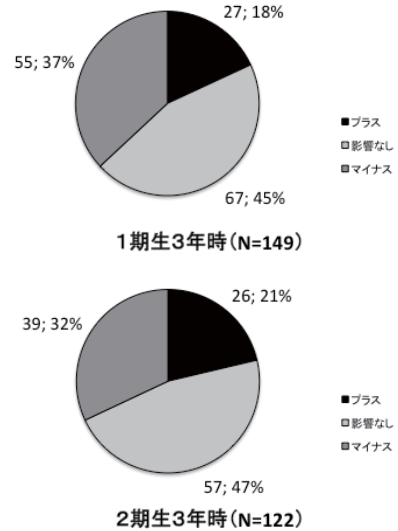


図3 3年時における新設大学であることの学生生活の充実度への影響

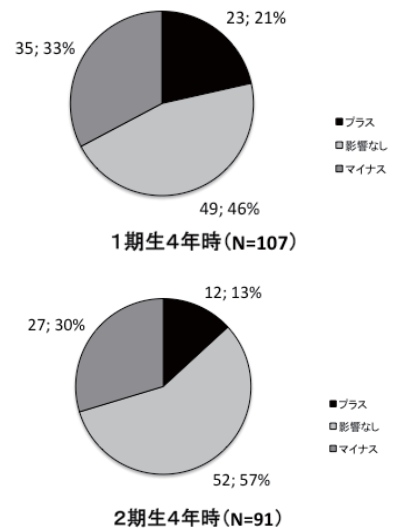


図4 4年時における新設大学であることの学生生活の充実度への影響

生の4年時の比較をt検定により行う。

まず、キャリア探索尺度においては、3年時は環境探索因子において1期生の方が2期生よりも得点が高かったものの、4年時では、環境探索因子、自己探索因子いずれも有意差がみられなかった(表1)。

表 1 入学年度別 4 年時キャリア探索尺度の平均値

|      | 1 期生       | 2 期生          |
|------|------------|---------------|
| 環境探索 | 3.12(0.74) | 3.23(0.80) ns |
| 自己探索 | 3.66(0.78) | 3.78(0.83) ns |

カッコ内は標準偏差 ns: not significant

次に、アイデンティティにおいては、自己斉一性・連続性因子 ( $t(196)=2.03, p<.05$ ) と対他的同一性因子 ( $t(196)=2.23, p<.05$ ) において、1 期生の方が 2 期生よりも有意に得点が高いことが示された。その一方で、対自的同一性因子と心理社会的同一性因子には有意差がみられなかった (表 2)。

表 2 入学年度別 4 年時多次元自我同一性尺度の平均値

|           | 1 期生       | 2 期生          |
|-----------|------------|---------------|
| 自己斉一性・連続性 | 5.11(1.29) | 4.74(1.26) *  |
| 対自的同一性    | 4.25(1.09) | 4.35(1.10) ns |
| 対他的同一性    | 4.35(0.85) | 4.09(0.74) *  |
| 心理社会的同一性  | 4.44(0.90) | 4.37(0.94) ns |

カッコ内は標準偏差 \* $p<.05$  ns: not significant

適応感においては、3 年時に続いて、居心地の良さの感覚因子、課題・目的の存在因子、被信頼・受容感因子、劣等感の無さ因子、いずれの因子においても有意差がみられなかった (表 3)。

表 3 入学年度別 4 年時適応感尺度の平均値

|           | 1 期生       | 2 期生          |
|-----------|------------|---------------|
| 居心地の良さの感覚 | 3.73(0.66) | 3.75(0.66) ns |
| 課題・目的の存在  | 3.60(0.71) | 3.71(0.68) ns |
| 被信頼・受容感   | 3.10(0.84) | 3.21(0.72) ns |
| 劣等感の無さ    | 3.48(0.70) | 3.30(0.77) ns |

カッコ内は標準偏差 ns: not significant

表 4 入学年度別 4 年時日常生活スキル尺度の平均値

|         | 1 期生       | 2 期生          |
|---------|------------|---------------|
| 親和性     | 2.88(0.63) | 2.92(0.61) ns |
| リーダーシップ | 2.50(0.67) | 2.42(0.57) ns |
| 計画性     | 2.45(0.69) | 2.63(0.68) ns |
| 感受性     | 2.95(0.56) | 2.93(0.54) ns |
| 情報要約力   | 2.58(0.53) | 2.65(0.54) ns |
| 自尊心     | 2.52(0.56) | 2.48(0.55) ns |
| 前向きな思考  | 2.68(0.71) | 2.64(0.61) ns |
| 対人マナー   | 3.17(0.54) | 3.19(0.57) ns |

カッコ内は標準偏差 ns: not significant

最後に、日常的スキル尺度においても、親和性因子、リーダーシップ因子、計画性因子、感受性因子、情報要約力因子、自尊心因子、前向きな思考因子、対人マナー因子、いずれの因子においても 3 年時と同様に有

意差がみられなかった (表 4)。

## 考察

本研究は、新設大学であることがもつ学生に対する影響を、大学生生活への意識およびメンタルヘルスの問題と、キャリアに関する意識や行動の発達との関連において検討することを目的とし、新設 1 年目の入学生 (1 期生) を 1 年生時から縦断的に継続調査してきた調査研究であり、これまで同様新設大学であることへの意識に関する質問項目、キャリア探索尺度、多次元自我同一性尺度、青年用適応感尺度、日常生活スキル尺度で調査内容を構成し、2 期生についても同様に調査を行った。

考察では、これまでの研究同様、新設大学であることが学生生活の充実感に及ぼす影響の感じ方の違いによって 3 群 (影響プラス群、影響なし群、影響マイナス群) に分け、1 期生と 2 期生の各年時での特徴について検討し、4 年時における各尺度の得点の比較について分析する。

まず、新設大学であることが学生生活の充実感に及ぼす影響の感じ方の違いについて各年時における 1 期生と 2 期生の分布の特徴について検討する (図 1～図 4)。

各年時において、影響なしの割合が 2 期生の方が 1 期生よりも多い傾向が見られた。これは、1 期生が大学生活 4 年間を通じて常に新設大学であることを意識したものになっていることが考えられる。また、影響プラスと影響マイナスの分布を比較すると、1 期生も 2 期生もすべての年時を通じて、影響マイナスの割合が多いという結果が示された。新設であることは学生にとってポジティブにとらえられる面はあるものの、どのように学生生活を送れば良いのかわからない不安、特に 2 期生においては 3 年時に影響マイナスの割合が高くなっていることから、就職やゼミ、卒業研究といった側面での不安が高くなったものと推測される。一方で、1 期生、2 期生ともに 4 年生では影響なしの割合が高くなっていることから、将来にある程度の見通しがたつことがこれらの不安を解消していると考えられる。こうしたことから、学生生活において上級生といったモデルを通して、見通しをたてられる環境の整備が重要と考えられる。

続いて、キャリア探索尺度、多次元的自我同一性尺

度、青年用適応感尺度、日常生活スキル尺度の4年時における1期生と2期生の比較について分析する(表1～表4)。

まず、キャリア探索尺度については有意差がみられなかったが、わずかに2期生の得点が高い結果となった。3年時を調査した高澤・播磨(2016)では環境探索因子において1期生の得点が有意に高かったという結果から変化が見られた。1期生については就職活動に関するモデルが学内に全くみられない、また就職活動に関する情報量が少ない状況で積極的にキャリアに関する環境探索を行わざるをえない側面が反映されていたものであった(高澤・播磨, 2016)。一方で、今回の調査時期が4年時の12月であるため、回答者の大半が就職活動を終えたことにより、キャリア探索が落ち着きを見せたことが反映された結果と考えられる。

次に多次元の自我同一性尺度を通してみるアイデンティティ感覚では、自己同一性・連続性因子と対他的同一性因子において、いずれも1期生の得点が高いという結果が見られた。高澤・播磨(2016)で示した3年時においては、対自的同一性因子、心理社会的同一性因子も含めいずれの因子においても有意差がみられなかった結果からの変化がみられた。この変化について、3年時と4年時の得点を比較すると2期生の得点は3年時と4年時でほとんど変化がなかったのに対して、1期生において3年時から4年時にかけて得点が高くなったことによるものである。自己同一性・連続性因子は過去を受け止め、将来の自分に確信をもつという内容の因子であるが、大学生活のさまざまな側面を自分たちで切り開いてきた経験が反映しているものと推測される。対他的同一性因子は他者に理解をされている感覚についての因子であるが、4年時の大学生活の多くを占める卒業研究や卒業関連行事を通じて、周囲の学生たちとの理解を深めたことが反映されたと推測される。先輩がいないことは自分たちで大学の歴史を切り開くというポジティブな側面をもっていることを示唆していると考えられる。

青年用適応感尺度については、3年時4年時ともに1期生と2期生の差はみられなかった。また、日常生活スキル尺度においても、3年時4年時ともに1期生と2期生の差はみられなかった。これらの感覚や意識は上級生の存在というよりも、学生生活への充実感と

いった個人的要因が強いことが示されたと言える。

### まとめと今後の課題

新設大学であることがもつ学生に対する影響を、大学生活への意識およびメンタルヘルスの問題と、キャリアに関する意識や行動の発達との関連において検討することを目的とし、新設1年目の入学生(1期生)を1年生時から縦断的に継続調査してきた調査研究であり、これまで同様新設大学であることへの意識に関する質問項目、キャリア探索尺度、多次元自我同一性尺度、青年用適応感尺度、日常生活スキル尺度で調査内容を構成し、2期生についても同様に調査を行い、今回は1期生と2期生の比較を行った。

新設大学であることが学生生活の充実度に与える影響についての1期生と2期生の経時的比較では、各年時において、影響なしの割合が2期生の方が1期生よりも多い傾向が見られた。また、影響プラスと影響マイナスの分布を比較すると、1期生も2期生もすべての年時を通じて、影響マイナスの割合が多いという結果が示され、現在の大学がおかれている環境を、学生が学生生活の充実感にどう反映させ、ネガティブにとらえている学生たちへのサポートとしてどのようなことが考えられるかが課題であることが示された。この課題について、岩瀬・上杉・小林・彦坂・堀口・吉田(2013)では大学生活における教員や先輩からの助言が重要であることが示されており、学年間をつなげるプログラムが有効であると考えられる。

また、キャリア探索尺度、多次元自我同一性尺度、青年用適応感尺度、日常生活スキル尺度の比較では、アイデンティティに関する尺度で1期生の得点が高いという結果がみられた。高澤・播磨(2016)において、キャリア探索では3年生の後期頃に学生の成長のひとつの節目が想定されることが示されたが、大学生活とアイデンティティ感覚との関連では、4年生の前半から後半にかけて、自らが後輩たちに対するモデルとなっていくことによってアイデンティティ感覚が高まる節目があることが想定されるかもしれないことが示唆された。

今後はこれらの知見を今後のキャリア支援や学生生活支援に活かしていくために、学年間の交流をどのように設けていくのか、そしてそれを学生生活の充実や充実感にどうつなげていくかを探ることが課題と言え

る。また一方で、新設大学の経験をもった学生が、社会に出てその経験をどのように活かしているのかを検討するという側面からもキャリア支援のあり方を検討する必要が考えられる。

## 引用文献

- 安達智子 (2008) 女子学生のキャリア意識－就業動機、キャリア探索との関連－ 心理学研究, 79(1), pp.27-34
- 岩瀬靖彦・上杉幸世・小林実夏・彦坂令子・堀口美恵子・吉田真知子 (2013) 就業力向上のための教育プログラムおよび学生サポートシステム構築に関する研究 人間生活文化研究, 23, pp.300-304
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因－青年用適応感尺度の作成と学校別の検討－ 教育心理学研究, 53, pp.307-319
- 島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, 54, pp.211-221
- 高澤健司・播磨俊子 (2013) 新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連 (1) 福山市立大学教育学部研究紀要, 1, pp.31-35
- 高澤健司・播磨俊子 (2014) 新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連 (2) 福山市立大学教育学部研究紀要, 2, pp.51-56
- 高澤健司・播磨俊子 (2015) 新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連 (3) 福山市立大学教育学部研究紀要, 3, pp.47-56
- 高澤健司・播磨俊子 (2016) 新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連 (4) 福山市立大学教育学部研究紀要, 4, pp.43-54
- 谷冬彦 (2001) 青年期における同一性感覚の構造－多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成－ 教育心理学研究, 49, pp.265-273

(2016年10月24日受稿, 2016年11月18日受理)